声

特集：農作業と野生動物の接点を求めて―平成 26 年度春季大会見学会―

日本農作業学会平成 26 年度春季大会現地見学会に参加して

實野雅太

東京農業大学大学院農学研究科

Masataka JITSUNO

今回の農作業学会春季大会・見学会に参加して、非常に考えさせられました。農業技術の進歩により水耕栽培や IT 技術を用いた農作業など、これまでとは異なる方法が考案されてきており、そこでの農作業学というものが必要となっていてきます。先生方からも仰っていた通り、その時代の農業に合わせた考え方をしなくてはならないので、農作業学会が非常に重要となると感じました。

講演会の研究テーマは非常に多岐にわたっており、農業機械や農作業効率といったものだけでなく、土壌の線虫や硬度など農作業が周囲の環境に対しどのように影響しているのかなど、私の分野とは少し異なる研究がたいへん勉強になりました。テーマセッションでの鳥獣害に対する研究は、大変であると感じました。私たちの試験圃場でも獣害により気象観測装置や他の測定装置のケーブルが噛み切られていたりしており、何らかの対策をしなくてはならないと痛感しています。

現地見学会で訪ねた豊岡市では、農薬等の原因で絶滅したコウノトリの復活の取り組みを通して、農業と自然環境中の動植物との関係を考え直す良い機会となりました。農業が人のためのものだけでなく、その他の生物にとっても非常に重要であることを実際に目にしたのは初めてでした。私の出身は大阪府の北部ですが、隣県がこのような状況であったことは知らず、今後は近くの農地

などに関しても周囲をよく見てみようと思いました。

篠山市の限界集落での獣害対策は簡素であるのに効果的で非常に興味深いものでした。電気柵に供給する電気には太陽電池を用い、雑草で電気が逃げないように電線の下にワイヤーメッシュを用いることで、サルが登った時のみに通電するようになっており、維持の面で効率的であると感心しました。町長の方針で動物と共存する農村を目指すという目標があると聞きました。しかし、サルやイノシシが山から人里へ進出して来る理由には、農作物の味を覚えたことだけでなく、森林が適切に管理されなくなったことなどもあると聞き、動物と共存し農業を行うためには林業をしっかりと行わなければならないとも感じました。

農業技術は進歩してきましたが、食育が必要になるほど農業の重要性に対する人の考え方が希薄になってきたようにも感じます。何のために、誰のために農業を行うのかという意識を常に持たなくてはならないということが、今回最も春季大会へ参加して実感したことです。平成 26 年度春季大会へ参加できて非常に有意義な時間を過ごすことができました。今後ともこのような機会がありましたら是非参加させていただきたいと思っています。宜しくお願い致します。

平成 26 年 7 月 21 日受付

平成 26 年 7 月 26 日受理

E-mail : 45612001 @ nodai.ac.jp